

立本博文研究室の紹介

実証手法を用いた 経営戦略論研究

立本研究室の紹介

- 立本博文（たつもと ひろふみ）
tatsumoto@gssm.otsuka.tsukuba.ac.jp
博士(経済学・東京大学)

- 筑波大学ビジネスサイエンス系教授

専門：競争戦略論、技術経営、国際経営

研究テーマ：国際競争力構築について

研究領域：ビジネス・エコシステムのマネジメント
プラットフォーム企業の競争戦略論

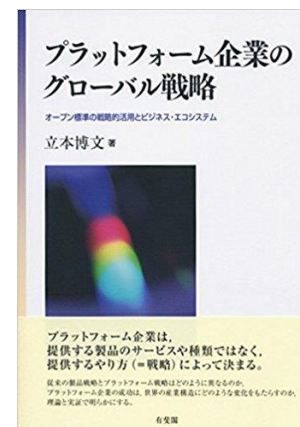
『プラットフォーム企業のグローバル戦略

:オープン標準の戦略的活用とビジネス・エコシステム』立本博文,2017 (有斐閣)

多国籍企業学会 2017年度 学会賞 (単行本の部) 入江猪太郎賞
国際ビジネス研究学会 2017年度学会賞 (単行本の部)
日本公認会計士協会 2017年度 第46回協会学術賞(学術—MCS賞)
組織学会2018年度 学会賞 (高宮賞) 著書部門
電気通信普及財団 第34回テレコム社会科学賞 奨励賞

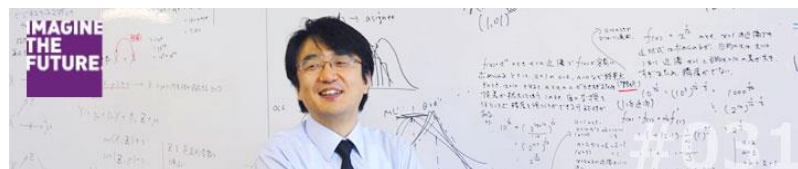
書籍の中身

- ・オープン標準の頻繁な形成とプラットフォーム企業
- ・ビジネス・エコシステムのとらえ方
- ・プラットフォーム戦略の競争戦略
- ・プラットフォーム企業と国際展開
- ・共存企業/ユーザー企業との関係
- ・プラットフォーム企業の戦略レバー
- ・プラットフォーム企業の台頭と産業構造変化



414頁
図 80枚
表 34枚

Tsukuba Future (筑波大学本学のWEB)
#031: 成功する企業経営のセオリーを科学する
<https://www.tsukuba.ac.jp/notes/031/>



最近の記事

グローバル市場でプラットフォーム企業の台頭が始まったのは1990年代にさかのぼる。はじめはコンピュータ産業、次に、デジタル家電やインターネット、そしてスマートフォンのようにデジタル化の影響が大きな産業で、プラットフォーム企業の影響力が顕在化していった。この背景には、これらの産業がデジタル化の影響を受け、エコシステム(生態系)型の産業に変化していったこと

近年、GAF A(グーグル、アマゾン・ドット・コム、フェイスブック、アップル)に代表されるグローバルな巨大企業の存在が、産業に大きな影響を与えている。こうした産業の基盤となる仕組みを支配し、提供すプラットフォーム企業は、後どう進化していくのか。そして日本企業はどのような取り組みをすべきなのかを考えた。



たつもと・ひろふみ
東京大博士(経済学)。専門は経営戦略論、イノベーション・技術経営論

GAF Aと日本企業 ①

立本博文 筑波大学教授

連携し技術革新起こせ

日経新聞(2019.8.15)

立本研究室の紹介

- 私の研究分野は、経営学の中の経営戦略論という分野に属します
- 課題を解決するために、事例研究と統計研究の2つを行います。
- 事例研究では、多数のインタビューと文献資料/統計資料を使用して、「因果関係のメカニズム」を特定します。
- 統計研究では、多変量解析などの統計手法を用いて、「因果関係の量的なインパクトの大きさ」を推定します。
- 「経営に役立つ法則」を見つけ出すことが重要なテーマです。
- 次のスライドからいくつかの研究を紹介します。

デザインマネジメントに関する研究

図1 アップルとソニーの意匠創作者ネットワークの推移

2005年

2009年

2012年

アップル

ソニー

- アップルとソニーのデザイン組織マネジメントは大きく異なる
- アップルはデザイン組織のネットワーク密度が高く、最大デザイングループの規模も大きい。
- ソニーのデザイン組織はネットワーク密度が低く、最大デザイングループの規模は小さい。
- アップルは高密度組織であり、デザイン言語の一貫性を維持しやすく、製品群間のデザイン一貫性を高くしやすい
- 一方、ソニーは並行して作業できるため、開發生産性や製品ごとの独自性を高めやすい

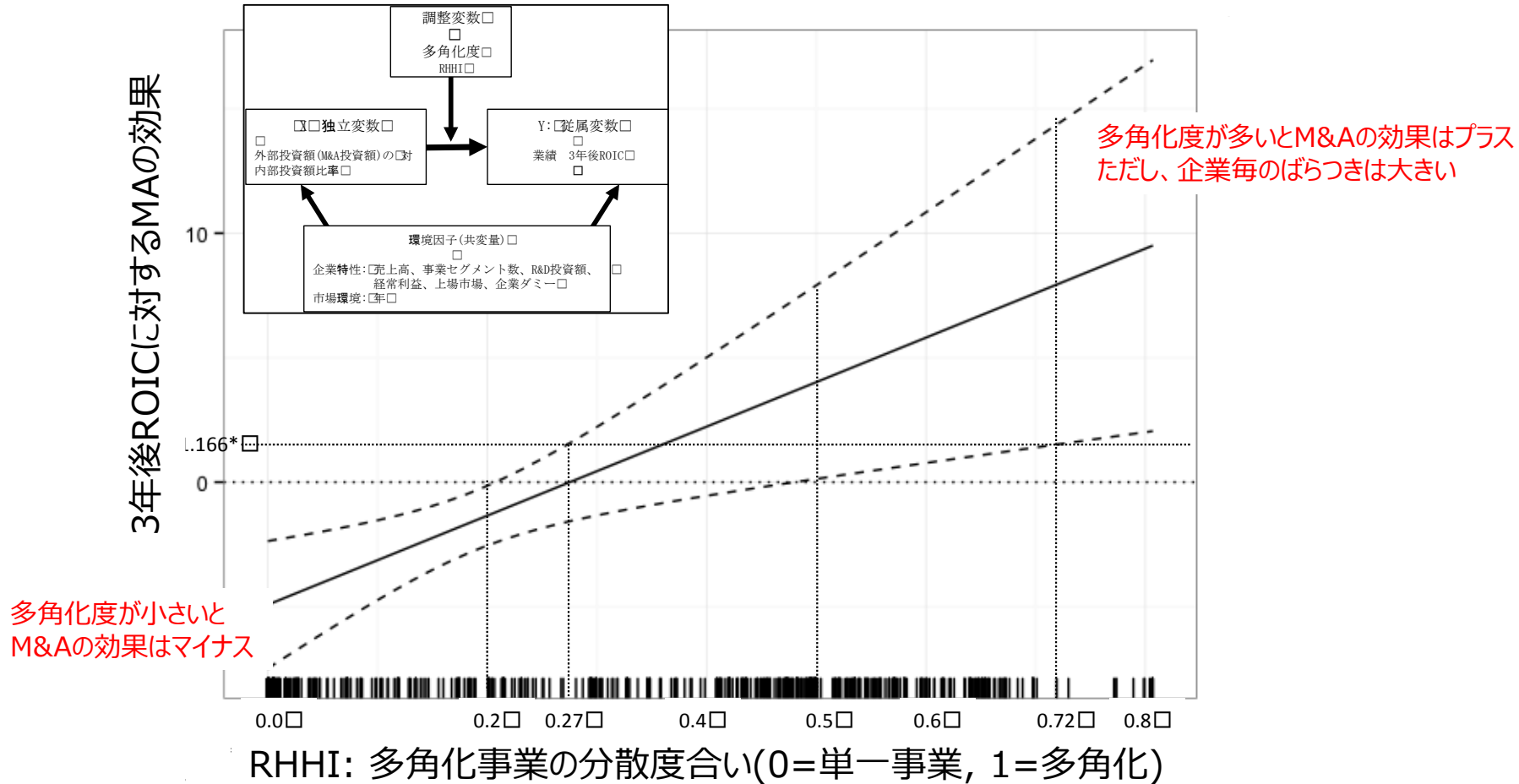
表4 アップルとソニーのデザイン開発の比較

		アップル	ソニー
戦略上のフォーカス：		製品群のデザインの一貫性	デザインの開發生産性・独自性
第1の違い	グラフ全体の密度	高い	低い
	非連結グラフの数	少ない	多い
	最大サブグラフの密度	同程度	同程度
第2の違い	最大サブグラフの規模	大きい	小さい
	最大サブグラフのスモールワールド性	同程度	同程度
第3の違い	次数中心性と媒介中心性の高位者の重なり	オーバーラップ：大	オーバーラップ：少
	上位意思決定者の関与性（ハンズオン性）	高い	低い

原・平坂・立本(2019)
「デザイン重視の製品開発におけるデザインマネジメント」
組織科学,52(3),4-19.



多角化戦略におけるM&Aの効果



芳賀・立本(2018)「M&A投資が企業業績に及ぼす効果の研究」組織科学,52(1),4-17.

企業の国際展開に関する研究

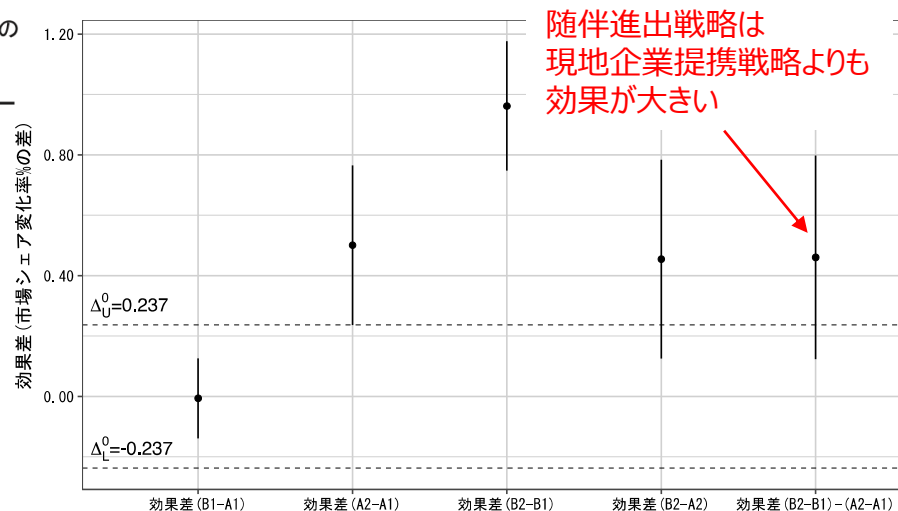
	段階的プロセスを無考慮	段階的プロセスを考慮 ①新規進出段階 → ②それに続く段階
最適な戦略オプション LC優位	既存パートナーの現地企業と提携(S)	存在しない
次善の戦略オプション	L優位 現地企業と提携(A)	新規に現地企業と提携(A1) → 既存パートナーの現地企業と繰返し提携(A2)
	C優位 既存パートナーと提携(B)	既存パートナーの非現地企業と提携(B1) → 既存パートナーの非現地企業と繰返し提携(B2)

- 随伴進出戦略は取引コスト効率優位、現地企業提携戦略はローカルアクセス優位がある
- 対象とした発電ガスタービン産業では、同じパートナーと海外進出する効果が大い
- 製品が複雑であるため、これを適切に処理できるパートナー構築の優位が大いと考えられる。

現地企業提携戦略と随伴進出戦略との関係

	マッチング前 (AUC = 0.944)				マッチング後 (AUC = 0.637)			
	既存パートナーと提携した群の平均	新規パートナーと提携した群の平均	平均の差	P 値	既存パートナーと提携した群の平均	新規パートナーと提携した群の平均	平均の差	P 値
当該市場経験	4.126	2.965	1.161	<0.001	3.620	3.651	0.031	0.768
MNE 累積提携数	6.031	5.531	0.501	<0.001	5.860	5.752	0.109	0.124
パートナー累積プロジェクト数	3.085	1.193	1.892	<0.001	2.416	2.406	0.011	0.824
プロジェクト複雑性	5.401	5.501	0.100	<0.001	5.474	5.462	0.012	0.567
市場経済水準	9.994	9.559	0.435	<0.001	9.851	9.782	0.069	0.317
市場成熟度	8.430	7.803	0.627	<0.001	8.138	8.081	0.057	0.629

傾向スコアマッチングによる
戦略実施群と非実施群との共変量の調整



提携オプション間の効果差

加藤・立本(2018)「国際提携戦略におけるパートナー選択のジレンマ：傾向スコアマッチング法を用いた実証研究」国際ビジネス研究, 9(1-2), 35-54.

オープンイノベーションに関する研究： 製薬産業における産学共同研究の実証分析

図1 技術品質・開発プロセス品質と発明・出願形態の関係

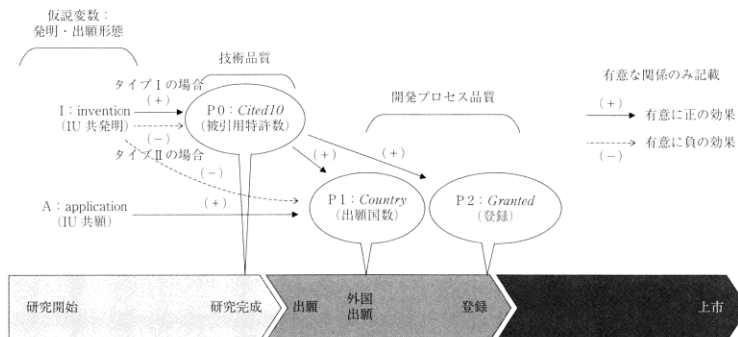


表2 実証分析の結果

Phase	P0 時点					P1 時点						P2 時点							
目的変数	Cited10					Country						Granted							
回帰モデル	ゼロ係数ポアソン回帰モデル					ポアソン回帰モデル						ロジスティック回帰モデル							
Model	M1	M2	M3	M4	VIF ^a	M5	M6	M7	M8	M9	M10	VIF	M11	M12	M13	M14	M15	M16	VIF
Count model (Intercept)	-0.109 (0.095)	-0.104 (0.095)	-0.095 (0.095)	-0.094 (0.095)		1.336*** (0.026)	1.337*** (0.026)	1.707*** (0.008)	1.721*** (0.008)	1.354*** (0.026)	1.360*** (0.026)		-0.414*** (0.103)	-0.419*** (0.103)	-0.285** (0.104)	-0.295** (0.104)	-0.293** (0.104)	-0.294** (0.104)	
Cited10								0.143*** (0.002)	0.142*** (0.002)	0.146*** (0.003)	0.145*** (0.003)	1.13			0.401*** (0.024)	0.401*** (0.024)	0.398*** (0.024)	0.398*** (0.024)	1.17
発明形態 IU 共発明 ^b		-0.119** (0.044)		-0.129** (0.045)	1.14			-0.084*** (0.016)	-0.018 (0.015)		-0.075*** (0.016)	1.20		0.087 (0.073)		0.146* (0.071)		0.110 (0.074)	1.17
U 単発明		-0.391*** (0.061)		-0.390*** (0.061)	1.07			-0.450*** (0.024)	-0.455*** (0.024)		-0.482*** (0.024)	1.06		-0.046 (0.092)		0.043 (0.091)		0.017 (0.092)	1.05
II 共発明		0.095* (0.037)		-0.134* (0.064)	3.13			-0.183*** (0.030)	0.038* (0.017)		-0.16*** (0.030)	3.01		-0.302* (0.147)		0.145 (0.088)		-0.267 (0.149)	2.93
出願形態 IU 共願 ^b		-0.204** (0.073)		-0.100 (0.076)	1.11			0.147*** (0.022)	0.082*** (0.020)		0.160*** (0.022)	1.17		0.012 (0.102)		0.074 (0.099)		0.037 (0.103)	1.13
II 共願		0.150*** (0.032)		0.245*** (0.056)	3.16			0.24*** (0.027)	0.095*** (0.016)		0.208*** (0.027)	3.03		0.534*** (0.130)		0.268*** (0.078)		0.456*** (0.132)	2.94
Zero model (Intercept)	-0.003 (0.025)	-0.010 (0.025)	-0.009 (0.025)	-0.015 (0.025)															
Company	Yes	Yes	Yes	Yes		Yes	Yes	Yes	Yes	Yes	Yes		Yes	Yes	Yes	Yes	Yes	Yes	
Disease Area	Yes	Yes	Yes	Yes		Yes	Yes	Yes	Yes	Yes	Yes		Yes	Yes	Yes	Yes	Yes	Yes	
Patent Type	Yes	Yes	Yes	Yes		Yes	Yes	Yes	Yes	Yes	Yes		Yes	Yes	Yes	Yes	Yes	Yes	
Year	Yes	Yes	Yes	Yes		Yes	Yes	Yes	Yes	Yes	Yes		Yes	Yes	Yes	Yes	Yes	Yes	
決定係数 ^a AIC	37047.84	36995.29	37021.95	36978.67		118168.9	117602.8	117009.6	116591.7	115751.2	115287.3		0.119	0.121	0.15	0.151	0.151	0.152	
Num. obs.	13241	13241	13241	13241		13241	13241	13241	13241	13241	13241		16518.66	16504.54	16177.48	16177.01	16169.49	16169.08	

***p<0.001, **p<0.01, *p<0.05

- 技術品質がよい発明は、開発プロセス品質もよい
- 産学共同発明がいつも技術品質を高めるわけではない
- 既存領域に関しては産学共同発明は、技術品質にマイナスの効果
- 新規領域に関しては産学共同発明は、技術品質にプラスの効果

表3 交互作用モデルにおける IU 共発明の境界効果

タイプ	疾患領域／ 特許・技術タイプ	U 単発明の 境界効果	IU 共発明の 境界効果	条件式*	
				0 < IU 共発明	U 単発明 < IU 共発明
タイプ I (IU 共発明の境界効果が最も高い)	疾患領域				
	抗腫瘍剤	-0.570	0.025	T	T
	抗感染症	-0.632	0.151	T	T
	泌尿器系	-1.092	0.078	T	T
	内分泌系	-1.054	1.458	T	T
	免疫アレルギー	-0.320	0.155	T	T
	呼吸器系	-1.035	0.124	T	T
	生理活性	-0.070	0.041	T	T
	血液関連	-0.275	0.290	T	T
	技術タイプ				
	バイオ	-0.189	0.028	T	T
タイプ IIa (IU 共発明の境界効果が最も低い)	疾患領域				
	代謝性	-0.536	-0.381	F	T
	抗炎症	-0.382	-0.044	F	T
	循環器系	-0.558	-0.032	F	T
	消化器系	-0.354	-0.014	F	T
	特許タイプ				
	物質	-0.654	-0.044	F	T
	製法	-0.397	-0.168	F	T
	製剤	-0.450	-0.113	F	T
	配合	-0.551	-0.109	F	T
用途	-0.259	-0.078	F	T	
タイプ IIb (IU 共発明の境界効果が最も低い)	疾患領域				
	神経系	-0.099	-0.224	F	F

*T: true (条件式に対して真), F: false (条件式に対して偽)

中西・立本(2018)「製薬産業における産学共同研究の実証分析」
組織科学,52(1),18-31.